

南会津針生「子供達の未来のためのアウトドア・プロジェクト」

北海道教育大学岩見沢校 アウトドア・ライフコース

1. 南会津町の概要

福島県南会津地方に位置する南会津町は東北地方南の玄関口であり、浅草まで電車で1本とアクセスも良好である。面積は886.47 km²のうち森林が92%である。令和2年1月1日現在の人口は15,318人、65歳以上の高齢者率は41.7%である。もともと田島町、伊南村、南郷村、館岩村の4つの町村が合併してできた町であるため、スキー場は旧町村に1つずつある。ソチオリンピックで現メダルを獲得した平野歩夢のホームゲレンデ南郷スキー場も南会津町のものである。

2. 針生地区の概要

針生地区は南会津町の中心田島地区に位置しており、179世帯414人（令和2年1月1日現在）、海拔700m～800mであり、田島地区で一番標高が高いところである。そのため、例年1～1.5mの積雪があり、超豪雪地帯でもある。また、針生地区は移住関係者が140人と人口の33%が移住してきた人であり、移住者用ログハウスがあるため、移住者は生活スタイルやコミュニティーによって居住エリアを選択している。

3. 針生地区の魅力～自然編～

針生地区には国の天然記念物である駒止湿原があり、ニッコウキスゲ・ワタスゲが咲き誇る。また標高1635mの七ヶ岳、ブラックバスが釣れる鴨沼、沢登りや溪流釣りが楽しめる阿賀野川の源流などがあり自然の宝庫である。七ヶ岳に沈む夕日は絶景であったり、水が綺麗なため針生で暮しているとアトピーが治ったりする可能性を秘めていたり、生活していても好きになる場所や自然がいっぱいあるという。また、冬はパウダースノーでスキーやスノーボードも楽しめるアウトドア好きには堪らない隠れた名称である。

4. 針生地区の魅力～木材利用～

針生区内には、30年前から建てられるようになった多くのログハウスがある。また最近では研修施設「ほしっぱの家」や地区の集会所に代表される縦ログ構法によってできたログハウスがある。特に縦ログ構法は地産地消を目指して作られた家であり、林野率の高い南会津町の多くの杉を大量に利用できるため、多くの活用が期待される。また、移住者用のログハウスが約80棟建設されていたり、林道を整備したマウンテンバイクのコースがあったり、

木のおもちゃを開発したりと木を有効活用した森林の利用方法がたくさんある。

5. 針生の課題

針生地区だけに起きている話ではないのだが、過疎化、少子高齢化は大きな問題である。過疎化、少子高齢化によって引き起こされる問題は大きく3つ挙げられる。一つ目には自然を管理する人がいなくなるため、田畑や森林が荒れてしまうことが起きる。林業従事者の減少から森林の手入れができなくなってしまい、自然災害にも弱い森になっていたり、木が大きくなりすぎて利用方法が難しくなっている。また、一つの畑が耕作をやめると、その隣の畑にも鳥獣被害がきてしまう。次に、働き口がないという問題である。これは、単に働き口がないという話ではなく、働く場所もあり人手はたくさん必要なのだが、安定した仕事となると、公務員か消防などになってしまい、バスの運転手さんや介護士など必要どころに人が来ない。最後に、街で子供を育てる仕組みの喪失である。原因として地域行事の減少や子供の減少などによって人と人の関わり合いの減少が挙げられる。

6. 針生の子どもたちと野外活動

(1) NPO ひのきスポーツクラブ・ジェネラルマネージャー湯田賢史さんのインタビュー

NPO ひのきスポーツクラブは、少子高齢化が進み、世代を超えた顔の見える関係が薄れゆく、針生を含んだ桧沢地区の現状に危機感を抱き、「子供からお年寄りまで生き生きとした地域づくり」を目指す団体である。今の子供の現状として「遊ぶ相手がいない」「遊ぶところはあっても遊び方がわからない」「取り仕切ってくれるボスのようなリーダーがいない」「インターネットの普及などによって遊ぶことの多様化」が挙げられる。そのような状況で、地域の中に祭りや行事を行う機会が減少し、子供たちが地域の年長者から学ぶ機会が喪失してしまった。つまり地域の中に人を育てる仕組みが崩壊してしまったのである。しかし、湯田賢史さんはその仕組みが残っている中で育った最後の世代であり、針生の自然の中での遊び方をよく知っている。そんな湯田さんが目指しているのは、地元が好きな子供を育て、その子が大人になった時に次の世代に魅力を伝えられるという「人づくりの好循環」を作ることである。

そのために、

- ① 地域の大人が「意図的に」野外活動を提供すること
- ② 昔と同じではなく「現代版」の人づくりの循環を作ること
- ③ 新しいことを作るよりも、これまでにあることの新しい組み合わせを創ることを意識しているという。また針生の自然や文化を子供たちに伝えていくときに、地元の高齢

者も巻き込んで地域全体が元気になるよう努力している。

7. 子供たちのために様々なイベントを仕掛けてきた地元の若者、湯田航大さんのインタビュー

湯田航大さんは針生で生まれ育ち、針生で今も暮らしている数少ない若者である。航大さんの幼少期の生活は、自然の中での遊びばかりだった。夏は川遊び、虫取りなど、冬は針生の誇るパウダースノーを満喫しスキーに勤しんだ。そんな航大さんは、今の子供たちは外で遊ばないことを気にしていた。また、東日本大震災をきっかけに、地元の良さに気づき、消防に就職し地元に残ることを決意した。子供たちとの活動は、航大さんが幼かった時に行っていたことをすることである。今の子供たちは学校で規制されていることもあり、川に子供達だけでいってはいけない。山に入るときも大人と一緒になければならないなど、多くの制限がある。しかし、それはとてももったいないことだと思っている航大さんは、子供達を自分が連れて外に遊びに行くようになった。また、少子高齢化と小中学校が廃校になったためになくなってしまった針生の夏祭りや、雪芭蕉祭りという冬祭りの企画運営をしたりと、地域の大人と子供が関わる場所をたくさん作ろうとしてきた。また自分一人でがんばるのではなく、同級生や同年代の若者とつながっていかうともしている。お盆時期に帰省した同級生を集めてソフトボール大会を企画したり、針生で企画した行事に関わってもらったり、針生や南会津で育った同級生たちに、将来的には戻ってきて欲しいと思っている。しかし、働くところがなかったり、安定した職業に就けなかったりと課題はたくさんある。

8. アウトドアライフコース卒業生で、南会津で林業を行なっている戸谷岳人さんの話

戸谷さんは2年前から針生に住んで伊南の森林組合で林業を行っていた。そんな岳人さんは、私たちに「アウトドアをするのに、なぜ針生でなければならないのか」という理由を真剣に考えなくてはならないと語ってくれた。針生でたくさんの方がいろんな活動をしていて、たくさん頑張っているが、それはなぜ針生で行う必要があるのか。それはとても難しい質問だった。最終的にたどりついたのは、針生にはそこに生きてきた針生の人びとがいて、その人たちが生きてきた歴史や文化があって、地元に対する想いがあるということだった。針生の人びとにとって私たちが知っているアウトドアがどのような意味をもっているのかしっかりと理解しなければならない。針生の人びとや、歴史、文化を大切にアウトドアをツールに、針生ならではの地域を活性化する方法を見つける事が重要であるということである。

9. 南会津で林業を通じた地域づくりを仕事にしている私たちの先輩、松澤瞬さんの話

アウトドア・ライフコース1期生で私たちの先輩であるNPO法人みなみあいづ森林ネットワーク事務局長の松澤瞬さんは、南会津町の地域振興を観光から考えたときに、林野率92%に眼をつけた。観光は名所を巡るだけではなく、体験することも観光になるのではないかと考えた。また、いろいろな森林の活用方法があるのではないかと考えた。

(1) 森林活用産業

針生の森にたくさん生えているクスノキ科の落葉低木であるクロモジという植物から香料である黒文字油を採取しアロマとして商品化をする。このクロモジ油は葉っぱ枝幹から採取し、木という資源を無駄なく使うことできる。また、1L100万円の値打ちがつくほどの希少品であるため、国内外に大きな需要があり今では生産が追いつかないほどである。また、木の家は針生の魅力でも出てきたように地元の木材で作られた80棟あまりのログハウスだ。この木の家は木を無駄にしない木造建築であり、風景や地域にマッチしたものである。

(2) 体験型観光産業

森というフィールドを活用したアウトドアでスポーツを体験、針生という地を生かして農山村生活体験をすることが観光になるのではないかと考えた。そこで、南会津の魅力である森林を生かし、新たなアウトドアフィールドの調査やマウンテンバイクのコース整備、臨床ビジネスなどを通じて荒れた森を整備すること、アロマや木材業など地場産業を体験として提供することなどを実施してきた。しかし、このような活動を継続的に行うことができないことの原因として、根本的な人手不足が問題となっている。しかし、このようなアウトドア活動が地域を活性化し、この地域に住む子供から大人まで住みよい地域づくりができるのではないかと考える。子供達の未来のためにも今何か動かなければなくなってしまうため、地道な活動が重要である。

10. 見えてきた課題

インタビューを通じて見えてきた課題として、ずっと住んでいる地域のおじいちゃんおばあちゃんは新しい取り組みに対して積極的になれないということが挙げられる。アウトドア観光などを行うにしても、地域のおじいちゃんおばあちゃんは、年金暮らしの中、必要以上に稼がなくて良い状況であり、無欲になっていると考えられる。そのため、NPO法人などが主体となっている活動にも参加してくれても積極的ではなくなってしまった。

また、人手不足というのはやはりとても大きな課題である。過疎化や少子高齢化によって、やりたい活動があっても、それを行う人がいなくて、うまく遂行する事ができなくなってし

まう。それによって新たな働く場所がつかれず、さらに働き手の減少が顕著になってきてしまっているのだ。

そうしたことになってしまった1番の原因は、針生の中にもともとあった「子供を育てる仕組み」が崩壊してしまったからではないだろうか。地域の生活を支えていた様々な集団や組織がなくなったり、大人と子供との関わりが減少したために、子供たちが地域の中で学ぶ場所や機会がなくなっている事が大きな問題なのだ。

1 1. 課題解決のために

そこで私たちは解決策として「若者・移住者を戦力にして現代的な子供を育てる仕組みづくり」を提案する。十分に議論は出来ていないが次のようにしてはどうだろうか。

(1) 「活動している個人や集団をコーディネートする組織をつくる」

「子どもたちを育てる仕組み」を作り直すためには人手が必要である。しかし、その人手が足りない。そのため、若者のUターンやIターンなどの移住者の定住が必要不可欠である。そのためには、針生に新たな仕事を作り、雇用を生み出させなければならない。その雇用を『アウトドア+林業』で行う。そのためにも若者・移住者を戦力にして現代的な子供を育てるシステムの仕組みの存在が不可欠になる。そうすることによって「人づくりの好循環」が生まれるのだ。

(2) そのシステムの概要

地元の有志や地域おこし協力隊などが町に働きかけて、町内で子どもたちのために活動したり、知識や技術を持っている人や集団をコーディネートする組織をつくる。つまり、個人や、消防団、老人会、NPOの団体などを統括し、活動によってその中の一つの団体または個人に事業委託する。この組織は各分野のエキスパート集団になる。そうすることで、各々の活動が尊重され、得意分野を伸ばし、得意分野で勝負する事ができるのだ。(委託された組織はリーダーとなるが、一番上の存在ではなく、どの団体も公平な立場である事が望ましい。) そのとき各団体がそれぞれで野外教育や、地元学などの活動を行う事で、基盤ができ、そこに地域のおじいちゃんおばあちゃんも関わってもらう。全部地域のおじいちゃんおばあちゃんに任せるのではなく、一緒にやってもらうという形にする事で、「やりがい」が生まれる。

また活動の中で人材が足りない部分や、もっと強化したい部分が出てくるだろう。そのときはエキスパートを外部から呼ぶことを考える。それをきっかけに地元に移住者のための新たな雇用が生まれ、活動の充実度も上がる。移住者には空き家や、利用が少なくなった針生のログハウスに住んでももらう。

12. これからの活動

私たちはこれらの仕組みづくりを提案させていただいたが、過疎化、少子高齢化、雇用の創出、林業の復活など、針生の子供たちの状況をつくりだしているとても大きな課題の解決については正直どうしていいのかわからないし、情報も知識も少なすぎる。そのため、次回以降は地域のおじいちゃんおばあちゃんと実際に話してみたり、実際に私たちが針生のフィールドで活動することを通じて、何ができて何ができないのかなどを確かめてみたいと思う。その中で針生の課題をより理解し、解決への糸口を模索していきたい。